

# 結 yui

八十八膳献穀会 会報

第陸号



潮垢離のあと立ち寄る宿の座敷では  
小謡が謡われる

写真提供 矢吹 平一 氏

そこに八幡神が社殿より現れる。これを見た光宗は感涙にむせぶ。そのうち、龍神も波間より現れて、龍燈を神前に備えると周囲は一際かがやきわたる。夜明けになって光宗が神前を拝すると八幡神は感応の声をあげ、天女は天空へ立ち帰り、龍神は水の上を翔け、波を蹴立てて飛び去って行く、というのが「飯野」のあらすじである。

内藤家によって作られたこの飯野八幡宮ゆかりの曲が、たとえ「小謡」の形であったにせよ、磐城領内に伝播して謡い継がれてきたことが確認でき、快い思いがした。

この曲の由来を踏まえて、小謡「飯野」を矢吹さんにいつかご披露頂きたいと考えている。

(いわき市文化財保護審議会委員)

## ユデマメ 和田 文夫

「なんにします」というので、「ウン、ビール」というと、「ハイ、どつぞ」と、目の前へグラスが置かれ、そこへすいっと手がのびてきて、白い泡がスウツと上がってきたのが、グラスいっぱいのところまで止まった。

「いやー、ありがと」と、そのまま一息に飲んだグラスを置いたら、そこに真っ白の小皿で、枝豆が出ていた。

「おや、もつ枝豆出たのか」というのへ、

「いやー、もつとうにですよ」という。

今は、こんなごろと思うのに、花でも野菜でもあるんだから、どこで、どうしてつくられるんだろつと思つ程だ。

先ごろまでは、枝豆といつと、十五夜の月見が近づいたころでないと食えなかった。



そろそろ、ユデマメ(茹で豆)の節になったなというの、夏を過ぎて秋だといつことでもある。「お月見さまになつから、あそこのユデマメ見てこつ」とか、また人によつては、「こつしや(今年は俺んとこでは、おそくつてお月見さまにまんにあねえ)間に合わない)ようだ」などといつこともある。

## 入会案内

飯野八幡宮八十八膳献穀会 会員募集

奉耕会員 二十五名

現在 賛助会員 五十三名

特別会員 八名

飯野八幡宮の古式大祭で行われる八十八膳献穀神事は古くから連綿と受け継がれてきたもので、県の重要無形民俗文化財に指定されております。

八十八膳献穀神事を永く守り伝えてゆくために、八十八膳献穀会を発足させ、神饌田を設けて、田には糯米を作り、畑では野菜等を栽培し、御神饌として奉納しております。

この御奉仕を通じて、日本の伝統的な農耕儀礼の復元と、風土に根ざした農業文化を、新しい世代が理解してさらに受け継いでゆくことを願っております。なにとぞ、私共の活動をご理解頂き、多くの皆様をご入会くださるようお願い致します。

## 結 yui No.6

発行日 平成十四年九月二十七日

発行所 八十八膳献穀会

千九七〇 八〇二六

福島県いわき市平八幡小路八十四

飯野八幡宮 社務所内

〇二四六 二二 二四四四

飯野八幡宮 web

http://www.noteplan.net/8man/

発行責任者 飯野 光世

とにかく、旧八月十五日の月見に供えてから食つというのが、普通であった。「なんだい、こつちでお月見さまこねえのに、早いことユデマメ食つたのがえ」というくらい、それは異例に近かった。それも普通の畑へつくったものでは、お月見様にユデマメにして供えられるというのも異例といつべきで、畔(くろ)まめ(田の畔につくる)でない、だめであった。今の田んぼの畔には、豆などつくつてあるのは見られない。畔シートなど便利なものが出来て、畔塗りなどやらなくともよくなったからだ。また、畔シートでは、豆をまく場がないのだ。稲をつくる田んぼは、田植えがおわつてから穂が出て色づくまでは、水をきらしてはならないから、水漏れを防ぐため、一度畔の土を削り落とし(くろ)ば切りといった、そこへ新しく田の土をこねて、五センチぐらいの厚さを塗りつける。畔塗りである。

実は、田植え前の仕事のうちで、この畔塗りは大変な重労働であった。土をこねるためには、水をかけなければならない。堀に堰をして水をかけてもよいのだが、そうすると、乾いている田んぼ一面へ水をかけてしまうことになる。そうすると、それが乾かないうちは「こちやこちやでうなえなくなる。畔塗りが出来たら、直きに田をうないたいのだ。できるなら、こねる土にだけ水をかけたい。堀から近いところであれば、大柄杓で堀からもかけられるが、遠くとなるとバケツなどで汲んでかけなければならない。だから、少しでも雨が降つたとすると、それと家族総出、子どもまで連れ出されて土こねをさせられる。塗るだけの土を畔際へ寄せて置いて、この土へだけ水をかけて、かけたら直き両足で踏む。畔踏みとか畔土踏みといふのである。こつちこねた土を、二本の角が出たような特殊な鍬ですくつて、畔へ張りつける。そのあと、平たい鍬でべたべた押しつけて表面をならす。この作業は、中腰になって力のあることなので、「畔塗りがええな」といいのだが……」という言葉が出たものだ。今はそれがなくなった。一枚のシートを張ればよいのだ。平鍬で、表面をすつとまでつけた時などは、左官が壁を塗り上げたと同じようで、夕陽などに光ったところなどは実に美しかったものだ。



この塗りつけた新しい土の頭のところへ、二十五センチ間隔ぐらいに穴をあけ、この穴へ二粒ずつの豆を埋め込んでおくと、これがやがてお月見さまに供えて、「ユデマメ」として食える豆になるのである。「ほら、ユデマメがたぎってあげよ、お月見さまさあげんだから」と子どもたちは言いつけられて、自分の田んぼの畔から、一抱かえの豆を刈り取って来て、まず馬小屋の前にとざりと置いて、ぱつちり実のはいつた手ごたいのある豆の莢を豆の木からもぎとる。馬がぶるぶると鼻を鳴らしている。莢豆をもちとった豆の木を、葉っぱごと「ほら、われにも食わせ」とと投げ込むと、馬は鼻を鳴らしながら、もくもくとくちびるを巧みに動かして、たちまち根元の方を残しただけで食ってしまつ。豆をもぐのも、三人、四人の兄弟、男も女も手でだからたちまちだ。

豆は直き大鍋で茹でられる。茹だつたら湯をしたみ出し、塩を振りかけて、鍋ごとぎっくりとおおるようにして、天地返しをすると塩がよくまざる。そろそろ夕方だ。「お月見さまさ上げてから食えよ」といわれて、大皿へてんこもり（盛り上げて）にして、ススキとハギを飾った仲の間へ上げて、板の間へおろしてある大鍋を囲んで、みんなの手がのびる。片方の手に豆を握って、片方の手は握っている豆を一莢ずつ取って、一粒一粒口のなかへはじき込む。取りたての豆だからうまくいことは確かだ。子どもたちは、それはどうでもよいのだ。自分たちで刈り取って来て、もぎとった豆を隣の子に負けないで、ぶちぶちと口のなかへはじき込めばよいのだ。空になった莢があたりに溜まった。一番上ののが、「からっほ馬を食わせて」と、下の子どもに命じるのだ。

和田 文夫 著 『土の味』（いわき地域学會発行）より  
枝豆の写真 『明解 家庭の園芸』（新日本法規）より

## 今年も豊年満作 飯野光世

いま、あちらこちららの田んぼでは盛んに稲刈りがおこなわれています。今年には心配された台風の影響もなく、豊作とのことで安堵しております。いままではこのような心境にならなかつたが、八十八膳献穀会が結成され、新年の「おからすさま」行事から田植え、草引き、稲刈りと一年を通して農耕儀礼に接するようになり、おのずから生じたことと思えます。

日本には古くからいろいろな農耕儀礼が伝わっています。その中でも十二月四〜五日頃、石川県の奥能登地方でおこなわれる『アエノコト』が有名です。

『アエノコト』とはその年の田の神を各家庭に迎える行事で、2〜3月には今度は田の神を送り出す行事です。

神を迎えるアエノコトでは、家人が正装して玄関から神を迎え入れ、居間に案内して「ごゆっくりお召し上がりください」と食事をごちそうし、風呂に案内して入り、その年の居場所となる奥座敷へと案内します。



写真提供 八幡 文昭氏

そして神を送り出すアエノコトでは神様にお食事を差し上げたあと、お出掛けで「ごいいます」と神を苗代に案内して、鍬を入れ豊作を祈ります。なお、民俗学者柳田国男によりますと「アエノコト」の「アエ」は「饗」であり、「コト」は祭りの意味であるとしています。このように目には見えぬ神様をいいますがごく接待し、豊作を祈願する行事で農民の一途な心が伝わってきます。これから、各部落で「オンベマツリ」が行われます。これもまた豊作をもたらしていただいた氏神、屋敷神、田の神様に感謝し、家内安全豊年満作を祈る行事ですが、近年はこの御幣束（オンベ）を奉る場所がわからないと言つこともあるようです。

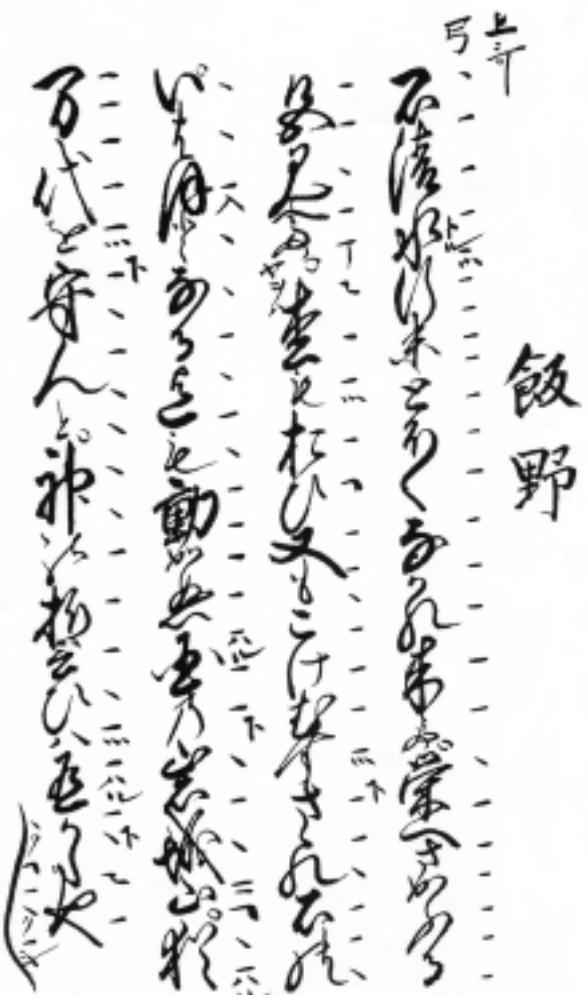
（飯野八幡宮 宮司）

## 謡曲「飯野」のこと 小野一雄

先だって、平・中塩の矢吹平一さんから「宝生流小謡集」という写本のコピーを恵与された。奥書は、文化十二年（一八一五）正月吉日 小野仙蔵とあった。小野家は四ツ波村の名主を勤めた旧家であるといふ。

小謡とは謡曲中の短い一節を抜き出して、祝儀や酒席などで謡われるものである。

その「小謡集」には、高砂・鶴亀・養老など三十曲から、いわば聞かせ所を抜き出した小謡が記されていた。そのなかに「飯野」が入っていたのは少しおどろいた。これこそ飯野八幡宮に関わる曲だったからである。



飯野

石清水行く末とほくながれ来て、栄へさかふる

色見へて、松もおひ又もこけむすさざれ石の

いはほとなる迄も、動かぬ国の岩城山、猶

万代を守んと、神の誓ひは有がたや、神の誓ひは有がたや

この曲は、元禄二年（一六八九）に作られ、翌三年に平城内で能「飯野」として演ぜられた。貞享二年（一六八五）に家督を継いで四代目の磐城平藩主となった内藤義孝の時代である。父の義概（風虎）は俳諧に傾倒し、兄の義英（露沾）もまた俳諧三昧の日々を過ごした。義孝は能楽に心酔して謡や仕舞い離子などに明け暮れたという。この作者を義孝自身とする確証はないが、彼を含めたその周辺の人物と推定される。

この「飯野」は、いわゆる五百番本と呼ばれる部類に属し、元禄十一年（一六九八）に江戸の本屋より版行されている。

奥州好島荘の預所を命ぜられた鎌倉幕府政所執事伊賀光宗（宮司飯野家の祖）が、八幡宮参詣のため鎌倉を出て名古屋の関を越え、好島荘に到着する。しばし里人を待つうちに、宮に仕えるしもべと思われる人物が現れる。光宗は八幡宮への案内を頼み参拝する。そこで案内のものが八幡宮の由緒を語りはじめ。詳しく物語るのを聞いた光宗が、その人物に貴方はいかなる人かと問いかける。

それに対し、遙々ここまでやって来た汝の敬神の思いに感じて姿を現した八幡神であると答える。そして今宵は明け方に天灯と龍燈が出現するので必ずここで待っているようにと言いついて社の中に入っていく。

光宗が社の前で祈願を込めて待っていると、楽の音とともに天女が灯を捧げて飛来し、松の梢に降り立つ。

（次ページへ）